
8月8日

間宮彰人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

8月8日

【NZコード】

N4167A

【作者名】

間宮彰人

【あらすじ】

とある田舎の町に住む深津知則は高校3年、夏休みに初恋の人のことを急に思い出したが…

第0話・プロローグ

8月8日、

夏真つ只中の暑い夜、

月はまだ半月で、それほど明るくはなかつたけど、人の輪の真ん中にある火のおかげであたりは随分明るかつた。

独り、

手すりに肘をかけて

その火を見ていた。

いつまでも、

いつまでも…

第1話・ポストの中身

「あちい…」

夏だから暑い、当たり前だ。

しかしど当たり前とわかつていても割りきれない」とのほうが多い。セミの声も手伝つてか、余計暑く感じる。

こんなくそ暑くちゃ集中できない。

なんて言い訳してみる。実は勉強したくないだけだ
部屋からでて、リビングへの扉を開けると、ひんやりした空気が俺を包んだ。

「俺は扇風機でお勉強、あんたはエアコンでテレビですか」ソファにぐつたり寝転がっている母に向かい俺は皮肉つた。

「別にいいでしょ。あ、ポスト見てきて」

このクソババア…！　きつとお前は地獄行きだ…
渋々ながら外へでる。

うへえ…これはきつい、なんという暑さだ。

さつさとポスト見て家に入ろう。

ポストの中には手紙が2~3枚、よれよれのシールが貼られた広告にあと一枚、シンプルな紙が一枚。

「納涼盆踊り大会…」

うう、陽光が当たつてジリジリと暑い。俺はさつさと家中に入つた。

手紙を適当にテーブルに投げると、すぐに部屋に向かつた。

実は言うと俺の部屋にもエアコンはある。使つと変な疲れがたまるから嫌いなんだ。

勉強机に座り、問題集と向かい合つ。だけどどうにも集中できない。暑さのせいもあるだろ？。しかしそれ以上に、俺はさつきの紙が気になつっていた。

盆踊り…そう言えば昔盆踊りの時に会つていた女の子がいた。笑う

と可愛くつて、無邪氣で、天然で、俺の…初恋の人…。
気になりだすと考えつて止まらないモノだ。俺はシャーペンを問題
集に投げ出すと昔を思い出しあじめた。

第2話・出会い

別に、特別なことなんてあの娘との間には起きなかつた。親の付き合いで出会つて、仲良くなつて、いつの間にか好きになつていた。ただそれだけ。

その感情に気づいたのはもっと後のことだつたけど。まだ俺が、自分のことを僕と呼んでいた…あの頃、はじまりは幼稚園を卒園したばかりの、3月の下旬のことだつた…

車の中、流れる景色に田を向けていた。

「ねえ、これからどこに行くの?」

景色から田を反らさずに僕は聞いた。

「いいとこ」

お母さんもまた前から田を反らさずに言つた。
またこれだ…

実はこの質問はこれで3回目、多分いくら聞いても別の答えはかえつてこない。

それから30分くらい、僕らはある大きな建物の前に着いた。白を基調とした大きな建物、ホテルだ。

チェックインを済ませると、

部屋には行かずロビーで立つていた。

「なんで部屋行かないの? もう疲れてきたんだけど…」

「もう少ししたらね」

…多分さつきと同じ。

だから僕は何も聞かないで待つことにした。

それから少しすると、

「お～い、奈津子～」

とお母さんの名前を呼ぶ声。

振り向いて見ると大きめのバッグを抱えた女人と三人の女の子。この人たちを待っていたみたいだ。

「待たせてごめんねっ！」

女人…女子の母親だろう、その人は顔の前で両手を合わせて言った。

「いいよいよ。じゃあ紹介するね、これが息子の知則、今日明日よろしくしてやってね」

お母さんに促され僕はお辞儀をして小さく、

「よろしくお願ひします」

と言った。すると

「よろしくお願ひします」

と四者四様というか、バラバラに四人が返してきた。

「じゃあこっちも紹介するね。右から小学2年の 、今年小学生になる佳那子かなこ、幼稚園の年中の 、今日明日よろしくね」
女子三人は、それから一呼吸おいてはつきり、明るく言った。

「お願ひします！」

その明るい声に触発されて、僕もさつきより大きく明るく、

「お願ひします！」

と返していった。

これが僕と佳那子ちゃん、

かなちゃんとのちょっと変わった出会いだった…

閉じていた目を開いて、意識を現在に戻す。

もう十年くらい前のことが、断片的にだが鮮明に頭に残っている。かなちゃんの名前しか思い出せないのは、それだけ俺が彼女の事だけをずっと意識していたからだろう。

年が同じだったこともあり、俺たちは直ぐに仲良くなつたけど、住む場所が少し遠いこともあり、小学校に上がってから、会うことはほとんどなかつた。

必ず会うことになつていたあの日以外は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4167a/>

8月8日

2010年10月17日07時39分発行